

1.2.1. ブライダルサービスと情報化

橋本 雄太

1 はじめに

本受託研究では、結婚式の情報化に焦点を当て、3年間にわたりブライダル/ウェディング業界における情報サービスの利用動向と展望を調査した。本稿はその最終報告論文である。

本稿の構成は以下の通りである。まず本章に続く第2章において、2022年4月に結婚式を挙げた筆者自身の経験をケーススタディとして、結婚式における情報サービスの利用の実態について述べる。第3章では、統計資料とWeb上の具体的事例をもとに、ブライダル業界におけるDX(Digital Transformation)の動向について概況を述べる。第4章では、近年発展が目覚ましい生成AI(generative AI)のブライダル業界における活用の現状を紹介し、今後の展望について考察する。最後に第5章において本研究全体のまとめを述べる。

2 新型コロナ禍の結婚式と情報サービス利用—筆者の経験を事例として—

筆者は民俗学分野の教育を受けたことのない人文情報学分野の研究者であるが、コロナ禍明けの2022年4月に自身の結婚式を挙げる機会を得た。以下では、この機会を一種のフィールドワークと捉えて、結婚式の本番および準備段階において用いられた情報サービスについて述べる。

結婚式の概要と新型コロナウイルスの影響

筆者は自身の結婚式と披露宴を2022年4月3日(日)に、東京都千代田区にある学士会館にて開催した。結婚式と披露宴はいずれも新郎新婦の親族、職場、友人らを招いて行うもので、午前中に会場付属のチャペルにて人前式の結婚式を実施し、午後に披露宴を実施した。新郎新婦を除く参加者は39名であった。

実は筆者と妻は2019年5月にすでに入籍しており、当初は2020年4月に結婚式を開催する予定であった。しかしながら新型コロナウイルスの流行のため、二度にわたって延期を余儀なくされたという経緯がある。一度目の延期は2020年4月、二度目の延期は2021年4月だった。幸い、2022年3月21日に東京都の新型コロナウイルス蔓延防止条例は解除され、翌月に式を実施することができた。ただし、解除後も東京都からの要請があり、披露宴会場の一卓あたりの人数は5名までに制限され、また卓上にはゲストを仕切るアクリル版が配置された。また、結婚式前日に筆者の親族のひとりが新型コロナウイルスに感染していたことが判明し、濃厚接触者である同居家族も含めた3名が欠席することになった。また新婦側にも、発熱により直前に参加を見合わせたゲストがいた。式と披露宴の間、筆者と妻はマスクを外すため、ゲストの不安感を取り除くために式の前々日にPCR検査を受け、陰性であったことを司会者からアナウンスしてもらった。

結婚式準備のために利用したオンラインシステム

結婚式および披露宴の準備は、基本的に担当のウエディングプランナーとの対面の打ち合わせを通じておこなったが、招待者情報や引き出物の登録など分量の多いデータの入力と管理は「ONE-W」という Web システムを利用した。これは PIEM 株式会社 (<https://www.piem.jp/>) がブライダル事業者向けに開発・運営する Web サービスで、結婚式準備に関わるさまざまな作業を Web ブラウザ上で完結することができる。

ONE-W にはウエディングプランナーと新郎新婦それぞれが利用できる多種多様な機能が実装されている。筆者が新郎としてサイトにアクセスした際には、次のような機能が利用できた。

- イベントカレンダー
- 招待者情報登録
- 招待状の発送先・文面管理
- 招待者の出欠管理
- 引出物情報の管理
- 席次表のデザイン編集

たとえば「招待者」メニューでは、ゲストの姓名、肩書、敬称、住所といった情報を、新郎新婦それぞれのグループ（家族、親族、友人、職場関係）にカテゴリ分けして編集することができる。登録した情報を Excel 形式でダウンロードすることも可能である。また「席次表」メニューでは、これら招待者を披露宴会場の各テーブルへの割当を決めることができる。割当が完了すると、実際に配布される席次表のプレビューも生成することができる。

ONE-W システムと並んで「Wedding Sound System」という Web システムの使用もウエディングプランナーから依頼された。これは披露宴中に流す音楽を Web ブラウザ上で登録可能にするもので、会場の音響を担当する村上音楽事務所が提供するシステムである。新郎新婦は披露宴中に流したい音楽を、「新郎新婦入場」や「乾杯」「お色直し退場」といった各タイミングについて Wedding Sound System 上で指定することができる。流すことのできる曲目は登録済みのリスト（100 曲程度）から選択することができるが、リスト以外の曲目を使用したい場合は、CD 原盤を持ち込まねばならない。音楽のストリーミング再生が主流になった昨今、CD 原盤の持ち込みはやや時代錯誤にも思えるが、これは JASRAC と披露宴会場が結んでいる包括協定にもとづきこのような方式が採用されているとのことである。

小括：情報サービスが果たした役割と限界

ONE-W が利用できたことで、新郎新婦側のデータ管理の手間、特に出席者に関する情報管理の手間はかなり軽減された。というのも、出席者の情報や出欠の可否は結婚式本番に向けて日々更新されるもので、出席者情報に変更がある度にウエディングプランナーに連絡すると多大な手間が生じるからである。出席者のステータスを ONE-W 上で一元管理できたため、ウエディングプランナーとの情報共有は非常に楽であった。

ONE-W システムは結婚式の準備に関わる多くの工程を Web 上で完結させる手段を与え

てくれるが、もちろんすべての工程が Web 上で完結する訳ではない。結婚式の進行や司会者とのやり取り、披露宴会場の装花やテーブルクロスを選択、料理コースの決定といった工程は ONE-W 上では機能として提供されておらず、ウェディングプランナーとの対面の打ち合わせで決定した。これらの工程は各結婚式会場によって差異が大きく、システムとして標準化することが難しいのだろうと思われる。逆に言えば、招待者や引出物の管理といった、多くの結婚式で共通する要素は標準化し、システム化していくことが、ブライダル事業者にとっては合理的である。新郎新婦側にとっても、情報を一元化できる Web システムが利用できるメリットは大きい。

今後とも、結婚式の多くの要素が ONE-W のようなシステムで管理できるように標準化されていくことと思われるが、あらゆる要素が標準化されパッケージされた結婚式は、個性の脱落した非常に無味乾燥なイベントになるだろう。他の冠婚葬祭儀礼と同様に、多くの人々にとって結婚式は「一回性」の高いイベントであって、標準化・大量製造を志向する情報システムとその意味では相性が悪い。少なくとも結婚式については、当面全面的なパッケージ化というものは起こらず、「一回性」を確保する形で情報化・システム化が進行していくのではないか。

ただし、こうした「一回性」をある程度確保しつつも、情報システム化を極限まで推し進め、非常に安価にブライダルサービスを提供するブライダル事業者が今後出現するかもしれない。若年層が既存のブライダルサービスのコストを負担に感じ、そうした安価なサービスを受け入れることがあれば、ブライダル事業の市況は大きく変化するだろう。IT 技術の活用によってそうした急激な変化が起きた業界は枚挙に暇がない。ブライダル事業に近い領域で言えば、婚活ビジネスはアプリの登場で一挙にシステム化が進行してしまった。

3 ブライダル業界の DX (Digital Transformation)

デジタル技術を駆使してビジネスプロセスや生活形態を変革することを指す「DX (Digital Transformation)」という言葉が普及して久しい。DX はブライダル業界においても進みつつあり、結婚式のあり方に少なからず影響を及ぼしている。特にコロナ禍を通じてブライダル業界における DX は急速に進行しつつあり、挙式や披露宴をインターネット配信する「オンライン結婚式」まで登場するようになった。

前章では筆者自身の経験をもとに、結婚式の準備や実施段階においてどのような情報サービスが活用されているかを紹介した。本章では、より視点を広げ、ブライダル業界における DX 推進を通じて登場しつつある新しい結婚式のあり方について、統計資料と具体的事例から現状と今後の趨勢についてまとめる。

オンライン結婚式

「オンライン結婚式」とは、新郎新婦が式場や自宅から挙式や披露宴の様子を配信し、オンラインでゲストに参加してもらう結婚式の形態である。新型コロナウイルスの流行により対面の活動が厳しい制限を受ける中で、新しい形の結婚式として注目を受けるようにな

った。新郎新婦の挙式の模様を動画配信するものや、Zoomなどのオンライン通話システムを利用して、ゲストと双方向でコミュニケーションをとるものなど、オンライン結婚式にはさまざまなパターンがある。コロナ禍において「3密」を避けることができ、主催者と参加者双方にとっても費用や準備、移動にかかる負担を抑えられるといったメリットがある一方で、対面の場合に比べてゲスト間でコミュニケーションをとることが難しく、一体感や臨場感に欠けるといったデメリットが指摘されている。

リクルートがまとめた『ゼクシィ結婚トレンド調査 2022』[2]では、2022年に首都圏で開催された結婚式478件のうち、およそ11%がオンラインによる披露宴・ウエディングパーティーを実施したと報告されている。一方でオンライン結婚式を取り入れなかったカップルは、「招待客とは実際に会って一緒に過ごしたいから」(61.0%)、「特に必要性を感じなかったから」(33.9%)といった理由を挙げている。

オンラインでの事前打ち合わせ

結婚式の開催にはウエディングプランナーとの複数回にわたる事前打ち合わせを経ることが一般的であるが、この打ち合わせにもオンラインツールの利用が浸透しつつある。Zoomなどのオンライン通話システムを利用して事前打ち合わせをおこなうことで、打ち合わせ場所まで出向くための時間や費用を節約でき、新郎新婦が別々の場所にいっても打ち合わせを実施できるといったメリットがある。一方で、結婚式会場の見学や招待状、ゲストブックなどの現物確認には適していない。

上述のリクルートによる調査では、首都圏で結婚式を実施したカップル311組のうち、48.6%がオンラインによる打ち合わせを利用したと報告されている。なお筆者も2022年4月に結婚式を都内で挙げたが、準備にあたって複数回ウエディングプランナーとのオンライン打ち合わせをおこなった。

オンラインご祝儀

オンラインご祝儀とは、オンライン決済サービスを利用して結婚式ゲストから新郎新婦に贈られるご祝儀である。主に招待状とセットになっていることが多く、記載されたQRコードやリンクを読み込むと、その場ですぐに支払うことができる事前決済が主流となっている。新郎新婦にとっては、結婚式当日に親類や友人にご祝儀を管理してもらう手間を省くことができ、また事前決済の場合は式前にお金を入手できるというメリットがある。またゲストにとっても、新札やご祝儀袋を用意する煩わしさを省略することができる。一方で、オンラインご祝儀には決済にともなう手数料やサービス料が必要であり、また高齢ゲストにとっては支払いが難しいといったデメリットもある[3]。

オンラインご祝儀サービスには、デジタルバード社が運営するmarica(<https://www.onlineweddingcard.jp/maricaorder/>)などがある。結婚式の招待状をハガキで送付する代わりに、招待状機能をスマホやパソコンから閲覧可能なWebページにまとめた「WEB招待状」と呼ばれるサービスと組み合わせて利用されることが多いようである。

上述のリクルートによる調査によると、2022年に首都圏で開催された478件の結婚式の

うち、一部またはゲスト全員を対象にオンラインご祝儀を取り入れた結婚式は1.6%とまだ少数にとどまっている。

VR 結婚式

オンライン結婚式をさらに進め、VR (virtual reality) 技術を応用した形態が「VR 結婚式」である。近年の VR 技術の進展は目覚ましく、Meta Quest 2 など高性能かつ安価な VR ヘッドセットが急速に普及しつつある。こうした VR ヘッドセットは平面のディスプレイと比較して没入感・臨場感において非常に優れており、特にゲーム用デバイスとして多数の人々に愛好されている。VR 結婚式は、この VR ヘッドセットを用いて遠方のゲストに結婚式に参加してもらう仕組みである。たとえば[4]では、グアムで挙式したカップルの結婚式に、東京ビッグサイトに集まった親族が VR ライブ中継で列席する事例が紹介されている。

VR 結婚式はまだ統計資料にも現れない非常に特異な形態の結婚式であるが、今後「メタバース」が普及することで一般化していく可能性もある。メタバースとは、コンピュータ上に構築された3次元の仮想空間のことであり、ユーザーは上に挙げたような VR ヘッドセットを通じてメタバースに参加する。現実世界と同様に、メタバースのユーザーはその中で他のユーザーと交流し、社会生活を送ることができる。現在 Meta 社 (旧 Facebook) をはじめとする巨大 IT 企業がメタバースの開発と研究に多大な資金を投じており、我々の社会生活の大部分がメタバース上の活動で代替される日も遠くないという観測もなされている。

日本国内で人気の高いメタバースの VRChat にて結婚式を挙げたカップルの事例がすでに報告されている[5]。新郎新婦も参列者もいずれもアバターの姿で式場に集い、式場からオーダーメイドの指輪、タキシードやウエディングドレスといった結婚式の諸要素がいずれも VR 空間上に再現されている (図1)。



図1 メタバース結婚式の模様(出典:[5])

小括：結婚式 DX の可能性と限界

ここまで、結婚式における近年の IT 技術利用のあり方を統計と具体事例をもとにまとめてきた。結婚式において IT 技術利用の目的は、次のようにまとめることができる。

1. コロナ禍における対面接触を避ける方策として
2. 対面活動にともなうさまざまな労力や費用を削減する手段として
3. 時間的・場所的制約から離れてゲストの参加を可能にする手段として
4. 現実世界では難しい新しい表現を実現する手段として

オンライン結婚式やオンラインご祝儀は経済的合理性から見れば優れた選択肢として映るが、実際にはコロナ禍を経てもごく少数の普及に留まっている。その理由は、「一生に一回しかない結婚식을オンラインで済ませたくない」「対面で直接親族や友人に祝福してほしい」といった、結婚式の一回性や、対面での親密な人間関係を重視する価値観が多くの人にとってまだ普遍的だからであろう。

一方で、メタバースのようにオンライン空間上での人間関係が今後一般化し、人々の対人関係についての価値観が変容した際に、結婚式の形態が大きく変化する可能性も否定できない。VR 結婚式やメタバース結婚式は、現時点では非常に特異な事例に過ぎないが、結婚式のあり方を考える上で注視しておくべき形態であると思われる。

4 ブライダル業界における生成 AI の利活用

前章では近年のブライダル業界における IT 技術活用のさまざまな事例を取り上げた。2022 年以降のごく新しい潮流として、「生成 AI」(generative AI) を活用した新しいサービスの提供が各地で始まっている。とりわけ 2022 年の ChatGPT の公開以降、生成 AI は目覚ましい勢いで発展を続けており、今後の成長が大いに見込まれる技術である。本章では、ブライダル業界における生成 AI の活用のあり方を具体的事例とともにまとめ、今後の展望について考察する。

生成 AI の概要と事例

生成 AI とは、テキストや画像、動画、音声といったさまざまなコンテンツの生成に特化した AI プログラムに対する総称である。

生成 AI の代表的な事例に、OpenAI が公開した「ChatGPT」[6]がある。ChatGPT は数百億語のテキストデータを学習した「大規模言語モデル」(Large Language Model; LLM) であり、高い自然言語能力と問題解決能力を有する汎用的な AI である。ChatGPT は「プロンプト」と呼ばれる人間からの指示文を受け取り、文章の要約や数学の問題の回答、コンピュータープログラムの生成から作詩に至るまで、さまざまなタスクを実行することができる。

同じく OpenAI が公開した「DALL E3」[7]は、画像生成に特化した生成 AI である。DALL E3 はユーザーが入力したプロンプトをもとに、瞬時に高精細な画像を生成することができ

る。画像生成にあたっては写実的なイラストやアニメ調のイラストなど、ユーザーはさまざまなスタイルを指定することができる。従来の画像生成 AI にありがちな構図の破綻が見られることは少なく、生成された画像と人間が手で描いた画像とを見分けることは非常に困難である。

ビジネスの文脈では、生成 AI は次のようなタスクにおいて活用が期待されている。

1. コンテンツ生成

文書、広告コピー、ブログ記事、マーケティング資料の作成支援

2. 自動化された対話

チャットボット、バーチャルアシスタントによる顧客対応

3. 翻訳・ローカリゼーション

文書の高品質な自動翻訳

言語の違いを超えたコミュニケーション促進

4. データ分析と報告

量のデータから洞察を導き出し、レポートを作成

5. 創造的タスク

製品デザインのアイデア出し

広告やマーケティングキャンペーンの創造的コンテンツ生成

ブライダル業界においても生成 AI の活用の試みが活発になされており、実際のサービスとして提供される事例も増えてきている。以下では、カテゴリごとに実際の活用事例を紹介しよう。

コンテンツ生成

結婚式ではスピーチや招待状、プロフィールムービーなどさまざまな「コンテンツ」が提供されるが、その作成には高いコストと労力、またアイデアやセンスが要求される。ここに生成 AI を応用することで、コンテンツ作成の省力化や発想支援に繋げようというサービスの公開が進められている。

たとえばテキスト生成 AI サービスの [easy-peasy.ai](#) では、同サービスが生成可能なさまざまなコンテンツの一例として、結婚式でのスピーチを自動生成する AI を提供している。ユーザーは「新郎新婦の名前」「新郎新婦との思い出や経験」といった項目を入力すれば、その内容に応じたスピーチを AI が生成してくれるというものである。

画像生成 AI を駆使したサービスでは、ウェディングドレスの写真を生成する写真加工アプリが人気を集めている。「YouCam Perfect」[8]は、累計 4 億ダウンロードを超える人気のカメラアプリである。このカメラアプリでは、ユーザーがアップロードした写真をもとに、さまざまなタイプのウェディングドレスを着用した写真を合成してくれる。

画像生成だけでなく、実際のウェディングドレスのデザインに AI を導入したサービスも海外で公開されている。WearMe AI[9]は、ユーザーが指定した理想のウェディングドレスのスタイルや色、パターンをもとに、実際に裁縫可能なウェディングドレスの 3D デザイン

を生成するサービスである。

AI によるコンテンツ生成は、多様なコンテンツが提供・消費される場である結婚式と相性が良いと言えるだろう。極端な事例では、結婚式の司会進行までも ChatGPT に任せたカップルがいる。2023 年に米国コロラド州で挙式したこのカップルは、仕事の都合で結婚式の準備に十分な時間を確保することができず、新婦の父親の提案で司会進行に ChatGPT の自動生成音声を採用することを決めたという。

対話型 AI

ChatGPT のようなテキスト生成 AI をバックエンドとして利用した、チャットボットサービスの提供も複数の企業により進められている。ウエディング分野の WEB サービスを提供する「冒険社プラコレ」は、2023 年 9 月に結婚式を控えるカップル向けのチャットボット「愚痴聞き上手なドレシーちゃん (AI)」を公開した[10]。これは同社が 2015 年以来実施してきた 12 万人、4,550 万回のチャットサービス履歴データを ChatGPT に学習させて構築したチャットボットである。このチャットボットは、結婚式を控えたカップルに寄り添った形で結婚式場やウエディング演出の提案、新婦の愚痴などを聴くことを目的に設計されている。

株式会社エマニエリも同様にウエディングサービスのアドバイザーとなるチャットボット AI「みんなのウエディング AI アドバイザー α 版」を 2023 年 5 月にリリースしている[11]。

AI チャットボットサービス「AI さくらさん」を提供する株式会社ティファナ・ドットコムは、ブライダル業界における顧客対応向けのサービスとして、生成 AI を利用したチャットボット提供の利点を紹介している[12]。

まず、結婚式の前予約や相談が増加しているにもかかわらず、スタッフの限られた時間と手間では十分な対応が難しいことが挙げられます。また、専門知識を要する質問に迅速に対応することが求められるため、未経験のスタッフが対応する際に品質が低下するリスクもあります。さらに、電話やメールなどの問い合わせ対応には限界があり、顧客のニーズにスピーディかつ効率的に対応することが困難です。

このような課題を解決し、ブライダル業界の顧客対応を向上させるために、AI チャットボットの導入が注目されています。AI チャットボットは人工知能を活用した自動対話システムであり、24 時間 365 日の連続対応が可能のため、問い合わせの増加にも柔軟に対応できます。

式場やウエディング演出の提案は、これまで結婚式を控えたカップルとウエディングプランナーとのコミュニケーションを通じておこなわれてきたが、チャットボットの導入はこの作業を一部代替することで、人的コストを大きく低減する可能性がある。またカップルにとっても、AI であれば時間や回数を気にせず気兼ねなく質問や相談を投げかけることが

できるので、満足度の向上に繋がる可能性がある。

その他のサービス

これまでのところ、ブライダル業界における生成 AI 活用は、上の 2 カテゴリに限定されているようである。ただし、結婚式の次のような要素には生成 AI 活用の余地があるかもしれない。

- ゲスト管理…出席ゲストへの招待状の自動生成や、席次の自動配置など。
- 進行管理…利用者の要望をもとに、最適な結婚式の進行表を生成する。
- ウェディングムービー生成…これまで人間が編集作業を実施していたウェディングムービーの編集を、AI が一部または完全に自動化する。まだ動画の生成 AI は高コストだが OpenAI の公開した「Sora」など高性能なモデルが登場している。

小括：ブライダル業界における生成 AI の可能性

本章では、2022 年以降急速な発展を続けている生成 AI の活用事例を分野ごとにまとめた。生成 AI は文字通り日進月歩のスピードで進化を続けており、2-3 年経てば本章で取り上げた AI 活用の様相も大きく変わっているだろう。顧客とウェディングプランナーとの密なコミュニケーションが必要とされるブライダル業界のような労働集約型ビジネスにおいては、生成 AI に次のような強みがある。

1. 汎用性が高く、さまざまなタスクを実行可能である
2. 顧客ごとに高度なカスタマイズが可能である
3. 高品質な芸術的表現の生成が可能である

既存の多くの情報サービスは標準化・画一化を志向するものだが、生成 AI はユーザーの嗜好をベースに個々に最適化（ファインチューニングという）することができるため、ウェディングプランナーの業務を一部代行すると同時に、顧客に寄り添った提案やコンテンツ生成を提供することが可能なのである。この性質はビジネスにおいては非常に魅力的なもので、今後もブライダルサービスにおいて生成 AI の活用が一層進むことは容易に予想できる。

5 おわりに

本稿では、近年の結婚式の情報化の諸相を描き出すことを目的として、①2022 年 3 月の筆者自身の結婚式の経験、②ブライダルビジネスの DX（Digital Transformation）の趨勢、また③ブライダルサービスにおける生成 AI の活用、という 3 つのテーマを取り上げた。

第 2 章で取り上げた「ONE-W」システムのように、招待者や引出物の管理といった定型的な作業を効率化するための情報サービスがすでにブライダル業界において広く採用されている。また、対面イベントの開催が困難となった新型コロナ禍は、IT 技術を活用し結婚式自体をバーチャルなイベントとして開催するさまざまな新しい取り組みを促した。一方で、結婚式は多くの人々が生涯に一度だけ挙げる「一回性」の高いイベントであり、情報サービス導入がもたらす標準化や画一化と必ずしも相性が良いとは言えない。しかしながら

生成 AI が登場したことで、膨大な学習データを背景に、結婚式を控えたカップルの嗜好や要望に寄り添った提案をする AI を開発することが可能になった。今後も生成 AI を駆使して、労働集約的なブライダルサービスの省力化と、結婚式の一回性・個別性とを同時に追求する方向で技術発展が進むのではないだろうか。

参考文献

- [1] マイナビウエディング, オンライン結婚式のデメリット、費用、プランを紹介!, https://wedding.mynavi.jp/contents/special_contents/on-wed/#anchorlinkTab04
- [2] 株式会社リクルート, ゼクシィ結婚トレンド調査 2022, 2022 年 10 月, https://souken.zexy.net/data/trend2022/XY_MT22_report_06shutoken.pdf.
- [3] マイナビウエディング, 「オンラインご祝儀」とは? コロナ禍の結婚式で注目のサービスを徹底解説 ~メリットやゲストの声を紹介~, <https://wedding.mynavi.jp/contents/press/detail/3-1/>
- [4] KDDI トビラ, 日本初の『VR 結婚式』 新郎新婦は海外ウエディングでも、親族は国内で祝う?, <https://time-space.kddi.com/kddi-now/kddi-news/20171030/2143>
- [5] メタカル最前線, 結婚式をメタバースでも メタバース結婚式を挙げた夫婦にインタビュー, <https://metacul-frontier.com/?p=2039>
- [6] ChatGPT, <https://chat.openai.com/>
- [7] DALL E3, <https://openai.com/dall-e-3>
- [8] YouCamPerfect, <https://play.google.com/store/apps/details?id=com.cyberlink.youperfect&hl=ja&gl=US>
- [9] WearMe AI, <https://wearme.ai/>
- [10] PR Times, 本日、正式ローンチ【AI と結婚式準備】プラコレ「愚痴聞き上手なドレシーちゃん (AI)」を, <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000614.000021126.html>
- [11] 株式会社エニマリ, ChatGPT を使って「みんなのウエディング AI アドバイザー α 版」をリリースしました!, <https://note.com/anymarry/n/nd9a6a7882c28>
- [12] AI さくらさん, ブライダル業界の問い合わせは AI チャットボットで自動化! ChatGPT などの生成 AI との連携も可能? <https://www.tifana.ai/article/aifaqsystem-article-555>